

ORACLE

# 最新ERPへの完全ガイド

今日の革新的ビジネスリーダーのための  
ハンドブック

最新エンタープライズ向けハンドブック | Vol. 1 | 第3版



# 目次

## 概要

クラウド・アプリケーションの明確な必要性

## 第1章

今こそ、ERP刷新のタイミング

## 第2章

最新ERPの特徴

## 第3章

最新のERPシステムを導入するには

## 第4章

クラウド型ERPの成果を導入後に評価

## 第5章

最新のクラウド型ERPで  
オラクルが最善の選択肢である理由

## サマリー

Oracle Cloudの導入は今日始まる



## 概要

# クラウド・アプリケーションの 明確な必要性

調査結果から、従来のERPのシステムは、使いやすさとインサイトを考慮した設計になっていないことが明らかになっています。ビジネス・リーダーの4分の3以上が、現在使用しているERPシステムが現行の要件を満たしていないと回答しています。将来の計画に対応できないのは言うまでもありません。従来のERPシステムには、競争と成長に欠かさない、ベスト・プラクティスに基づく最新の機能が欠けています。データ主導型の組織を実現するには、運用の基盤そのものを再構築すること、つまり“刷新”が必要です。

オラクルは、従来および最新のERPシステムを利用する、何千社もの顧客との連携を通じて学んだ知識を共有することで、お客様のシステム刷新のお手伝いをするをを目指しています。そのためこのハンドブックでは、最新のERPを定義する基本的な特性について説明していきます。

ご存知でしたか？

90%

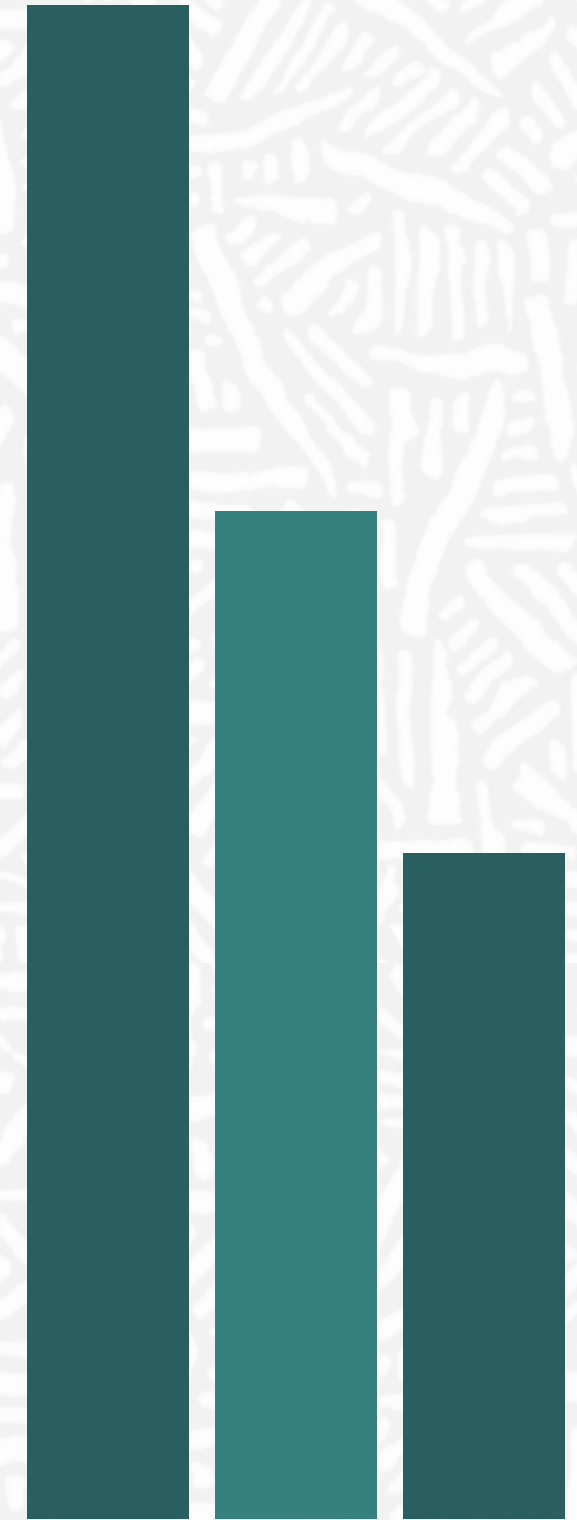
大手グローバル企業の90%では、3年以内にクラウド・コンピューティングが主流になります

60%

今後10年間で、生産性を強化する機会の60%がクラウドベースになります

44%

財務アプリケーションの44%が3年以内にクラウドに移行します



出典：『Don't Get Left Behind: The Business Risk and Cost of Technology Obsolescence』MIT Technology Review Insights (2019年)

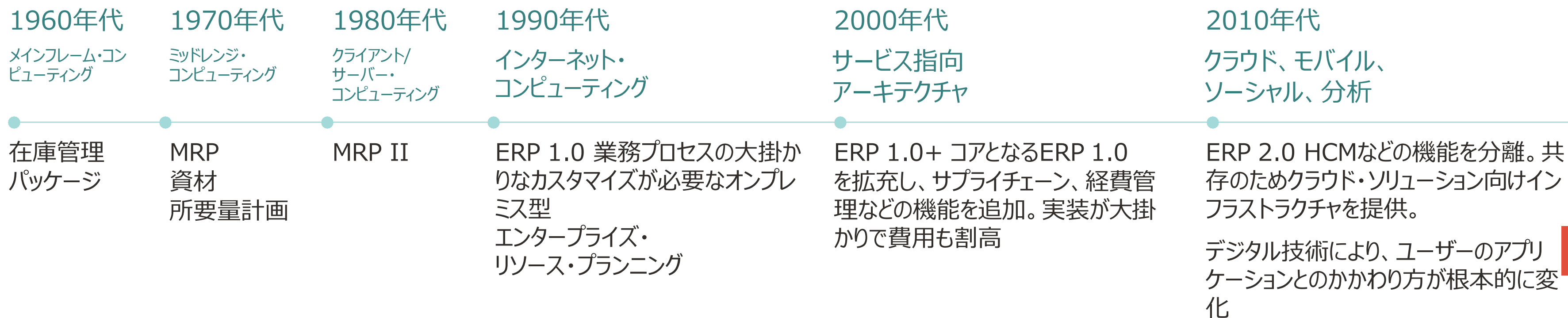
# ERP 1.0からERP 2.0へ

クラウドの急速な進歩により、あらゆる規模の企業において、ERPを取り巻く環境は大きく変化しています。モバイル・プラットフォームに加えて、場所や時間にとらわれずに仕事をするワークスタイルにより、過去の管理業務のようにオンプレミス環境に拘束されない、最新のクラウドベースのERPシステムが求められるようになってきました。この次世代ERP、つまり“ERP 2.0”は、“ERP 1.0”の強力な土台の上に構築されている一方で、プロジェクトに年数を要すこともなく、大掛かりなカスタマイズは一切不要です。

ERP 2.0ではクラウドを通じて速やかにソリューションが提供されるため、企業はセキュリティ、洞察、俊敏性の向上によって次世代の従業員を支えつつ、市場の激しい変動や業界の混乱に迅速に対応することが可能になります。

ビジネス上重要な協働や意思決定でカギとなるのは、企業データへのアクセスと分析、やるべきことを処理するために必要なインフラストラクチャとツールを提供する最新ERPシステムです。

ERP 1.0が初めて社内のメインフレームに導入されたときよりも、ビジネスの世界の複雑さは増し、競争は激化しています。増大するデータが業務やレポートだけでなくビジネス上重要な意思決定の原動力となる中、財務とテクノロジーの結びつきは強まる一方です。ERP 2.0を従業員や製品に合わせて調整することで、デジタル化により事業の俊敏性が実現し、運用と販売のさらなる成功につなげることができます。



# 第1章

## 今こそ、ERP刷新のタイミング

レガシーERP 1.0が組織運営の大きな原動力となり、外部とのやり取りを可能にし、競合との戦いに直接影響を及ぼしていることは明らかです。その一方で、社内における技術的変化と世代交代を考慮して、現在のオンプレミス環境が事業の発展の妨げになっている可能性についても考えねばなりません。事業規模に関係なく、刷新の必要性が明らかな転換点は3つあり、現在多くの組織が少なくともその1つを経験しています。

**1 運用の効率性** — 現在使用するERPシステムは、業務目標を支えているでしょうか。別のERPシステムを使用する企業を買収したり、レガシーシステムのアップグレードが必要だったり、子会社を発足したり、サービス共有モデルに移行する場合について考えてみましょう。これらのシナリオのいずれかに直面している場合は、運用効率化の達成が急務となるため、ERPの刷新についても検討する必要があります。

**2 デジタル変革** — ユーザーは、これまでのオンプレミス・ソリューションでは望むべくもない水準の連携と使いやすさを求めています。さらに、ERPシステムに対するユーザーの期待は、日常生活におけるデジタル技術の普及を反映しており、すべての操作機能で利用できる唯一の正しい情報源、構成可能なロールベースのダッシュボードを使ったリアルタイム分析、アプリケーションへのモバイルアクセス、ソーシャル・コラボレーション・ツールも必要としています。また、簡単かつ迅速に定期更新できることも重要です。

**3 成長と信頼** — 事業が成長してグローバルに展開すると、各国独自の会計、報告、コンプライアンスの要件に対応する必要が生じ、財務の複雑さは増すばかりです。企業買収、事業分離、新規市場、顧客の拡大、IPO（新規上場）に向けた準備、およびこれらの機会とその影響のモデル化に加えて、規制の厳格化に対応するためのプロセスが整備された、最適なシステムが必要になってきます。

いずれの転換点が該当するにしても、企業のニーズ、文化、予算、スケジュールに合った変革の戦略を策定することが重要です。ERP刷新の取組みの第一歩として、現在使用するシステムのどのような点が、事業目標を支えられていないかを認識するところから始めてみましょう。



# 最新のERP 2.0導入の タイミングを示す10のサイン

次の状況のうち1つ以上当てはまる場合は、最新ERPが必要です。

## 1 ERPのアップグレードが必要

オンプレミス・システムのサポート期限が切れて、競合他社がクラウド・ソリューションを導入しているため、オンプレミス・システムに高額なアップグレードが必要

## 2 使い勝手に対する不満の高まり

デジタルネイティブの従業員がERPシステムの使い勝手に不満を抱き、なぜスマートフォンアプリのように使いやすくないのかを問う声が高まっている

## 3 レポート作成の課題が増加

ERP 1.0には限界があるため、管理レポートの作成に手間がかかる

## 4 新しいハードウェアが必要

ERP 1.0の物理インフラストラクチャが老朽化し、コストがかかる設備更新が必要

## 5 保守費用が増加

ERPシステムの料金とサービス費用が年々増加している

## 6 統合されていない各システムによる異種データ

システムや企業データの分断が加速し、重要な問題に対する答えに齟齬が生じている

## 7 急速で世界規模の企業成長

オンプレミスのERPシステムが、海外進出、合併と買収、中核市場での成長の足かせになっている

## 8 新たなコンプライアンス要件

財務およびコンプライアンスの要件が増加し、会社に影響を及ぼしている

## 9 事業の需要の高まり

会社が需要の高まりに対応できていない

## 10 IPOへの備え

厳格な財務情報と内部統制が義務付けられた、株式公開の準備を進めている



## 第2章 最新ERPの特徴

どの転換点が自社組織に該当するかにかかわらず、最新ERPシステムの主要な構成要素は、クラウドへの移行を検討する企業の多くが抱える最大の不安に対処します。最新ERPは主に7つの要素で構成されますが、これらの要素は最新プラットフォームのパラメータと最新ビジネス・アプリケーションの設計の2つのカテゴリに分類されます。これら7つの構成要素によって、最新ERPシステムの標準が定義されます。俊敏性と成長の基盤を確立するためには、次のプラットフォームの構成要素を考慮する必要があります。

**1 セキュリティ** — 事業データは、事業そのものです。データ保護を最大限に強化するには、スタックの各レイヤーのデータを保護するマルチレイヤー手法が極めて重要になります。クラウドでセキュアなデータ分離アーキテクチャを使用することで、リスクが軽減され、データのアクセスと処理をさらに高速化することができます。

**2 統合** — ERPクラウド・ソリューションでは、事業、従業員、プロセスをシームレスにつなげるほか、他のクラウドやオンプレミスのシステム、サードパーティのソリューションも統合する必要があります。互換性とスケーラビリティを確保するためには、業界基準に基づく共通の枠組みが用いられているソリューションを選択する必要があります。

**3 パーソナライズ（カスタマイズとは異なる）** — ERP 1.0は、非標準、つまり顧客独自のビジネスのやり方に応じてカスタマイズされ、ダウンストリームの保守とアップグレードの問題が山積しています。業界基準に基づくプラットフォーム上に構築されたクラウドベースのソリューションでは、アプリケーション内でパーソナライズと構成を行えるため、“アップグレードの安全性”が強化されます。ワークフロー、統合、レポートなどの領域でオンプレミスのカスタマイズが行われている場合は、クラウドベースのソリューションで要件に対処できる可能性が高まります。

さらに、最新のクラウド・アプリケーションは事業の成長に合わせて拡張する柔軟性があり、最新のデジタル技術をサポートして組織のニーズを満たすため、設計に関する次の4つの要素を兼ね備えています。

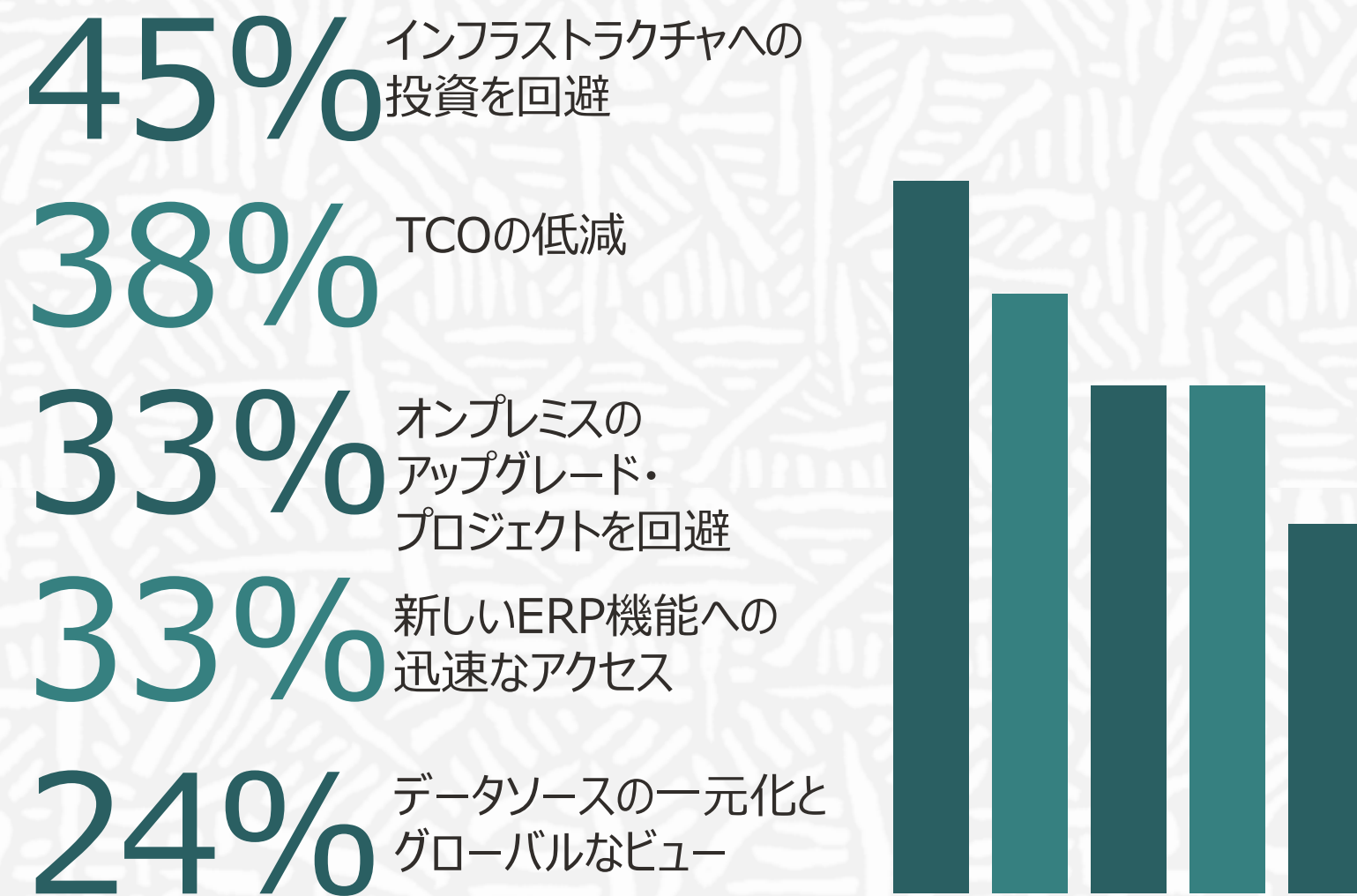
**4 完全性** — 組み込まれたベストプラクティスによって標準化が可能となり、費用が抑制されて生産性が向上します。クラウドへの移行が段階的な場合でも、ベストプラクティスに基づく統合された業務プロセス一式にアクセスできれば、企業の標準化が促進されます。クラウドERPのベンダーによってスイート全体のアプリケーションがサポートされるのか、または他のクラウド・ソリューションとの統合が必要かについて考慮する必要があります。運用の一般的なオプションである、クラウドとオンプレミスを組み合わせたハイブリッドモデルを最初に選択する場合は、オンプレミスとクラウド間のアプリケーションの統合を誰が行うかに留意しなければなりません。



- 5 **グローバル化** — 新規市場への参入や海外への進出では、複数の子会社や国ごとのローカライゼーションをサポートするERPクラウド・ソリューションが必要となり、複雑さが増します。また多くの場合、地域のデータセンターは、データレジデンシーの要件を遵守しなければなりません。適正なクラウドERPとは、オペレーション、事業部門、本部全体にわたって企業情報をシームレスに共有できるものでなくてはなりません。
- 6 **インサイト主導型の分析** — クラウドERPソリューションは、セキュリティで保護された、財務組織の中核からのリアルタイムのデータアクセスを実現し、すべての役割、レポート、分析にわたって唯一の正しい情報源を提供するものでなければなりません。これにより、最前線のマネージャーは高精度のKPIをタイムリーに入手でき、かつては決算期や別のデータウェアハウスの抽出に依存していたプロセスが大幅に簡素化されます。
- 7 **デジタル機能** — 最新の管理業務では、デジタル技術を業務プロセスとトランザクションに統合して、シームレスで生産性の高い、直観的なエクスペリエンスを実現することが必要です。ユーザー・エクスペリエンスは魅力的であると同時に、移動中の従業員のためのモバイルアクセス、セキュアなコンテキスト内の協働に対応するネイティブ・ソーシャル統合、インボイス画像化に対応する、すぐに使える光学文字認識機能などを含める必要があります。

# オンプレミス型ERP 1.0とクラウド型ERP 2.0の比較

以下は、ERP 1.0からERP 2.0に移行する上位5つの理由です。



出典：『The End of Technology Obsolescence』 MIT Technology Review Insights (2019年) および『ERP Trends』 Oracle (2018年)



# 第3章 最新のERPシステムを導入するには

最新ERP戦略の策定にあたっては、実装パートナー候補のクラウドプロバイダを含む導入チームが一丸となって協力する必要があります。テクノロジーや市場規模にかかわらず、ERP刷新戦略においては次の点に考慮すべきです。

**1 プロジェクトの目標を明確に定める** — 生産性、決算のスピード、インフラストラクチャ費用などの事業の利点を測定するためのKPIを設定すること。測定可能な項目を使ってプロジェクトのコンセンサスを形成して承認を獲得し、戦略に合わせて調整を図り、節目ごとに成果を評価する基準を提供すること。

**2 プロセスと在庫システムの文書化** — 社内およびサードパーティのソリューション、統合ポイント、冗長システムなどを含むITインフラストラクチャの完全なマップを作成すること。これには、データの所有権、管理、使用に関連した役割を理解するための組織構造も含まれます。また、プロジェクトを開始する前に、唯一の正しい情報源を明確にしておくことも重要です。

**3 経営陣の強力なサポートを獲得** — 企業の規模にかかわらず、**経営陣のサポートは不可欠です**。プロジェクト全体を通じて、経営層の継続的なサポートが必要です。従業員への継続的な情報伝達と合わせて、新しいクラウド型ERPシステムに対する上層部のコミットメントによって成功が促進されます。

**4 組織に合った実装手法を選択** — クラウド型ERPへの移行プロセスは、お客様ごとに異なります。クラウド型ERPのアプリケーションをすべて一度にデプロイする必要はありません。多くの企業では、価値の高いクラウド・サービスの導入を段階的に行っており、オンプレミス・ソリューションと組み合わせたハイブリッド環境を選択しています。また、中核となるERPアプリケーションから刷新プロセスに着手して、完全なエンド・ツー・エンドの変革に向けた取組みを行う企業もあります。



クラウドのノウハウ —  
5つのステップからなるサクセス・ガイド

[詳細情報](#) →

# 新しいテクノロジーが最新ERPをさらに推進

5 アプリケーションに組み込まれた標準的なベストプラクティスを活用 — クラウド・アプリケーションには最新のベストプラクティスが組み込まれているため、従来のソフトウェアとともに古くなったプロセスや手法を一新することが可能です。ERP 2.0では、組み込みの標準化に必要な共通業務プロセスの80%以上が提供されるため、プロジェクトを開始する最適なシステムと言えるでしょう。

6 レポートや分析を早い段階で調査 — クラウド型ERPでは、ユーザーはビジネスの状況をリアルタイムに把握できます。高度な多元的分析とデータの可視化によって、データウェアハウスに依存することなく速やかに洞察を得られます。プロジェクトプランの早い段階でレポートや分析のニーズを明確にすることで、導入後は有意義なレポートを迅速に作成できます。

7 スタート時からユーザーとプロセスオーナーを巻き込む — ERPシステムのエンドユーザーがプロジェクト成功のカギとなります。実装プロセス全体を通じて、定期的にデモやテストを実施するようにします。

戦略とロードマップがまとまり、ソリューションを選択してビジョンを支えるパートナー企業を決定したら、実行に移す準備は万全です。今こそ、導入を実行する絶好のタイミングです。組織をクラウド型ERPプラットフォームに移行することで、たとえ段階的な移行であっても、従業員のワークスタイルが根本的に変わります。全員のコミットメントを育むスタートを祝うとともに、節目に達した時点で再び祝いましょう。



## より短期間で収益増加

新しいテクノロジーを導入した企業では、58%速く増収を達成（期間：36か月 / 導入していない企業と比較した場合）

58%  
速い



## インテリジェント自動化

が規制コンプライアンスの鍵になる

74%  
が同意



## ほとんどの財務の承認業務が

今後5年間で自動化される

77%  
が同意

# オンプレミス型ERP 1.0と最新のクラウド型ERP 2.0の比較

## 財務モデルと所有コストの比較

	ERP 1.0	ERP 2.0
<b>事業の財務モデル</b> オンプレミス型ERPシステムに対する設備投資には重要な事業の成長に欠かせない資金の一部が充当されるほか、課税対象となることが多い	CapEx 前払い購入	OpEx 月単位のサブスクリプション
<b>ERPソフトウェア</b> 必要で、課税対象となるがオンプレミスのソフトウェアは前払いの購入が、クラウド型ERPでは、月々事業経費として計上できる	\$	
<b>ERPソフトウェアの保守</b> オンプレミス型ERPでは、セキュリティ上の問題修正、クリティカルパッチ、更新に必要な保守費用が毎年発生する	\$	
<b>ERPソフトウェア用ハードウェア</b> オンプレミス型ERPでは、通常3～5年ごとにハードウェアの買い替えが必要となり、追加の設備投資が発生する	\$	
<b>ハードウェアの保守</b> 通常オンプレミス型ERPのハードウェアは、毎年の保守費用や契約、高額な費用がかかる設置場所、設備、人員が必要	\$	

全費用込み：  
追加のコストや隠れたコストは一切なし

	ERP 1.0	ERP 2.0
<b>ERPソフトウェア用データベース</b> オンプレミス型ERPシステムにはオンプレミス型データベースが必要であり、多くの場合、そのデータベースを導入するためのスタッフと請負業者が必要	\$	
<b>データベースの保守</b> オンプレミス型ERPでは、ERPデータベースをセキュリティで保護し、最新かつ最適化された状態を維持するために、年間保守費用と人員が必要	\$	
<b>システム・アップグレード</b> オンプレミス型ERPのハードウェアとソフトウェアのシステム・アップグレードは、3～5年おきに実施されるプロジェクトごとに、10万～100万ドル以上の費用がかかる	\$	全費用込み： 追加のコストや隠れたコストは一切なし
<b>システム・セキュリティ</b> オンプレミス型ERPシステムでは、セキュリティとモニタリングのソフトウェアの追加費用に加えて、監視と維持のための人件費がかかる	\$	
<b>システムの災害復旧</b> すべてのオンプレミス型ERPシステムで、災害復旧計画、インフラストラクチャ、サービス、人員、冗長化のための多額の費用がかかる	\$	
<b>その他の重要な要因</b>		
<b>ERPの導入と保守のためのITリソース</b> カスタマイズ、統合、報告、保守、アップグレード、パートナー企業/下請け業者に必要	多くを要する 直接のリソース、サブコントラクターのリソース、パートナー企業のリソース	最小限のみ 事業の最適化とユーザー支援のためのリソース
<b>導入スピード</b> プロジェクトの計画から開発までに必要な期間	1～2年 またはそれ以上...	3～6か月

## 第4章 クラウド型ERPの成果を導入後に 評価

効果的かつ包括的なERP刷新戦略の作成を終え、KPI（重要業績評価指標）を慎重に検討して文書にまとめたら、成果に対する評価基準が定まります。あとは、前進するためにこれまでを振り返るだけです。

KPIを設定したら、価値の測定方法について現実的になることが重要です。実装を開始する前に現状の測定基準を文書化し、結果を評価する合理的な間隔を定めます。これらの評価を基に、ビジネス目標とニーズに合わせて機能を構成することができます。このような作業は、クラウド・アプリケーションを使った方がはるかに簡単です。

さらに、プロジェクトの目標を評価して数値化することで、組織に対応付けた成熟度モデルを使って優先順位の基準を確立することが重要です。たとえば、自動化された高速なインボイス処理、決算およびレポートのプロセスの迅速化、IT費用の削減によって、売掛金を削減することが目標かもしれませんが、包括的な評価で重要なのは、技術面だけではありません。人員、ガバナンス、プロセス、戦略も成功するための重要な要因です。

有意義な結果を得るためには、これらの要因に関する総合的な測定を、本来のビジネスケースに結び付くKPIに組み込むことが重要です。どのような方法にせよ、手法を正当化するビジネス・ケースを作成することが重要です。クラウド技術の理解に役立つリソース、クラウド技術がもたらすプラスの効果、最新のクラウド型ERP 2.0の財務的利点を活用しましょう。

### テクノロジー以外の要因が 成功を促進

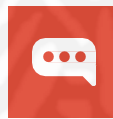
各クラウド型ERPプロジェクトの成功に直接影響を及ぼす、技術面以外の4つの要因は次のとおりです。

**人員** — ユーザーは、期待を上回り、ユーザー・エクスペリエンスを向上させる最新の設計を得ることが可能

**プロセス** — 更新されたプロセスにより、望ましい成果、レポート、データを達成

**ガバナンス** — アクティブなプロジェクトの監視とリスク管理により、スケジュールのリスクと配送費を低減

**戦略** — 積極的な企業育成と研修により、採用を迅速化



# 第5章

## 最新のクラウド型ERPで オラクルが最善の選択肢である理由

オラクルがお届けするエンタープライズ級の単一の統合型ERPクラウドは、ビジネスの成長を速やかに実現します。プラットフォーム、アプリケーション、財務/調達/プロジェクト・ポートフォリオ/統合業績管理を利用した手法を統合した、堅牢な基盤の上に構築されています。

オラクルのプラットフォームとアプリケーションは次のとおりです。

1 最新の標準に基づくプラットフォーム — オラクルはこの基本的な、傑出した設計原則を活かして次を実現します。

セキュリティとスケーラビリティ

複数のエンタープライズ・アプリケーションの統合と接続性

統合された1つのビジネスシステム

AI、ブロックチェーン、IoTなどの新しいテクノロジー

第2世代のクラウド・インフラストラクチャ

2 最新のベストプラクティスに基づいたアプリケーション — ERPクラウド・アプリケーションには、最新のテクノロジー、ベストプラクティス、接続性、さらに数十年にわたる経験による知識が結集しています。

21世紀のグローバルな会計組込み型

分析とレポート機能

1つの包括的なソリューション・スイート

将来に対応するエンタープライズ・アプリケーション

業種に特化したソリューション

3 最新の革新的な手法 — ERPシステムをクラウド内で刷新すると経済的なメリットが得られます。オラクルとパートナー企業は実装を確実に成功させるために、クラウド型ERPプロジェクトの財務的利点を判別するツールを提供します。

企業にとってのメリットを算出する計算ツール

財務面のセルフ評価

Oracle Consultingへのアクセス

Cloud Marketplaceパートナー企業カタログ

実際、Oracle Cloud ERPは、CapExモデルよりもOpExの方がはるかに多額の節約を達成できます。



## サマリー

# Oracle Cloudの導入は 今日始まる

どの組織もOracle Cloudを利用できます。オラクルの営業チームとパートナー企業が、成長と独自のCustomer 2 Cloudプログラムをご検討ください。成功の基盤である最新のクラウド導入をお手伝いします。すでにOracleオンプレミス・アプリケーションを使用している場合は、オラクル独自のCustomer 2 Cloudプログラムをご検討ください。

Oracle Cloud ERPを知る →

クラウド・デモを体験する →

製品の動画を閲覧する →

Customer 2 Cloudプログラム\* →

ライブ・デモをリクエストする →

オラクルの営業担当者とチャットする →

オラクルの営業担当者に電話する →

業界別機能の詳細を見る →

\*オラクルのJD Edwards、PeopleSoft、E-Business Suite ERPのお客様の場合  
最新ERPへの完全ガイド

以下を対象とする、包括的な  
セキュリティ、スケーラブルな  
デプロイメント、高いパフォーマンスを備  
えた1つの完全なSaaSソリューション

ERP | SCM | HCM | EPM | CX

経験豊富で革新的、グローバルな1社  
のクラウド・ベンダーが提供。

ORACLE



# ORACLE

オラクルについて

Oracle Cloudは、営業、サービス、マーケティング、人事管理、財務、サプライチェーン、製造用アプリケーションがすべて統合された包括的なスイートと、Oracle Autonomous Databaseに代表される、高度に自動化され、高いセキュリティを備えた第2世代インフラストラクチャを提供します。オラクル（NYSE：ORCL）について詳しくは、[oracle.com](https://www.oracle.com)をご覧ください。